

2021 年度(令和 3 年度)学校評価自己評価表

駅家中学校区	校番 82	福山市立駅家北小学校
最終更新日		2022年(令和4年)3月1日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	<中学校> 思考力 コミュニケーション力・協調性 意志決定力・志 <小学校> 課題発見・解決力 コミュニケーション力 挑戦する力
○子どもに選択肢を与えることで意欲を高めようと取り組んでおられる。継続してほしい。 ○小・中で明確な目標を定め、工夫しながら、細やかな取り組みをされている現状がよく分かった。	○小・中学校ともに根拠に基づいた記述や資料活用問題に課題がある。 ○「自分の良さは周りの人から認められている」が年々向上している。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	○日常生活の中に課題を見つけ出し、自分の知識を総動員して答えを導き出す。 ○他者との関係を協調的に築きながら、自分の考えを発信し、仲間と課題解決する。 ○自分の人生を切り開き豊かな未来を創ろうと見通しや展望を持ち自己決定する。 ○「主体的な学びによる思考力・判断力・表現力の育成」を研究テーマとする。 ・学力調査の分析から課題をつかみ具体的な手立てを研究し、授業改善を進める。 ・各種アンケート等による結果から、個別最適化を図り、子どもに「自己決定」の場を多く与える。
		中学校区として統一した取組等	

III 自校

ミッション 地域や保護者の信頼に応え、地域住民から愛される学校を地域と共に創造する	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) 課題発見・解決力 コミュニケーション力 挑戦する力	低学年 ○身近な問題に対して疑問を持ち、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力 ○自分の役割に責任を持つ力 ○自分の考えを伝える力	中学校 ○地域や社会の問題に対して、持っている知識を関連付けて考え、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力 ○自分の役割や言動に責任を持ったり、助け合ったりする力 ○自分の考えを伝え、相手の考えを比較しながら聞く力	高学年 ○様々な問題に対して、持っている知識や経験等をフル活用して考え、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力 ○自分の役割や言動に責任を持ち、共感的に聴きながらアイデアや知識を共有し深める力 ○地域・社会の一員であることを自覚し、持続可能な社会に向け、主体的に学んだり困難に立ち向かったりする力
学校教育目標 主体的に学び 仲間と共に 伸びゆく子どもの育成	めざす子ども像	研究 テーマ 「主体的な学びによる思考力・判断力・表現力の育成」 ～子どもが知的好奇心・意欲をもち、課題に向かって対話的に学び合う授業の創造～ 学びに向かう基盤である知的好奇心を高める教材研究	研究 内容等 ○持っている知識を関連付けたり自分で方法を判断・決定したりして主体的に学び合う授業 ○児童同士の協働や対話により、自分の考えを広げたり深めたりして対話的に学び合う授業	
現状 <児童生徒> ○既習事項を常に想起させたり、自分の経験と重ねて発言したりすることにより、「授業で考えることが楽しい」と感じる児童が増えている。 ○学力の伸びを把握する調査(4～6年)において、全国平均を超えている。 <授業> ○児童の疑問を引き出すための教材研究を行い、子どもの思考にそった授業展開(発問・指示等)を深めている。 ○思考ツールの活用やペア学習を通して、児童の主体的・対話的で深い学びを実現しようとしている。				

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立駅家北小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力以 達成 評価	評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状 況	力以 達成 評価	総合 評価	改善方策	
3	<u>確かな学力</u> 基礎的・基本的な学力の定着を図るとともに、主体的で対話的な学びを通して、思考力・判断力・表現力の育成	★	見直し	児童が自分の考えを持ち、仲間と対話する中で学び合う授業にする。	自分の考えをもち、子ども同士の発言の関わりを深めながら、学び合う。 カリキュラムマップに基づいた単元計画を活用する。	「授業が分かり、考えることが楽しい」児童肯定的評価 90%以上	「授業が分かり、考えることが楽しい」児童肯定的評価87%。 全国学力テストや学力の伸びを把握する調査において、学力的には定着しているが、情意面において課題が見られる。	3	3	校区研修や校内研修を通して、知的好奇心を高めるための授業の問いや構成、ICTの活用方法等を研修し、子ども同士の発言の関わりを進んで授業に生かすことができるようにする。	「授業が分かり、考えることが楽しい」児童肯定的評価86%。 研修を通して、子どもの思考にそった授業の具体やタブレットの有効な活用方法を深めることができた。	3	3	4	日々の教育活動においても、継続的に課題の共有を校内や学年間で連携し、主体的・対話的に学び合う授業を進める。
3	<u>豊かな心</u> 児童一人ひとりの自己肯定感を高め、意欲的に活動できる集団づくり	★	継続	自分が他者や集団のためになり、認められていると感じるなどの体験を多く仕組み、自己肯定感を高める。	学校行事、学級活動を通して、肯定的に評価する場面を増やし、自己肯定感を高める。 (担任外の教員からの評価も児童に伝える。)	「自分の良さは周りから認められている」児童肯定的回答 85%以上	「自分の良さは周りから認められている」児童肯定的回答88%。 各学級で、友達の良さを認め合う活動を取り入れた。	3	4	引き続き、帰りの会等学級の中で認め合う場を設定する。担任外の教員からの評価を積極的に児童に伝える。	「自分の良さは周りから認められている」児童肯定的回答85%。 学級で認め合う活動を行ったり、委員会やクラブ活動、専科担当からの評価を伝えたりできた。	4	4	4	学級の中で認め合う場を設定する。担任外の教員からの評価を積極的に児童に伝える。縦割り班活動を充実させて、高学年の自己肯定感を高める。
3	<u>健やかな体</u> 基本的な生活習慣の定着と体力向上の推進		見直し	基本的な生活習慣を身に付けさせるとともに、運動することの楽しさを感じさせながら体力向上を図る。	体力づくりにつながる授業づくりを行っていく。	「自分は進んで体力づくりを行っている」児童肯定的回答 80%以上	「自分は進んで体力づくりを行っている」児童肯定的回答79%。 コロナ禍で友達と触れ合う遊びや運動ができなかった。	3	3	全校で取り組むマラソンやなわとびについて、個人の目標を持たせ、意欲的に運動できるようにする。	「自分は進んで体力づくりを行っている」児童肯定的回答80%。 マラソンやなわとびの目標に向かって、意欲的に運動ができた。	4	4	4	持久力を高めるために、体育授業のはじめに鬼遊びやなわとびを取り入れる。運動する機会を増やすために、スポーツウィークの取組を積極的に行う。

1	信頼される学校 保護者・地域 に開かれた学 校づくりの推 進	新 規	学校の様子を保 護者・地域に積極 的に発信し、理解 を得る。	学校だより、ホー ムページ、学校行 事についての掲 示、メール配信、 タブレット(ゲー グル)等を通して タイムリーに情 報を発信する。	保護者の 学校満 足度 90%以 上 保護者のニ ーズに合っ た情報提供 を心掛けて いる。	保護者アンケートの結果、 情報発信に関する項目の 肯定的評価は、94%。	4	4	児童の学校生活の 様子がよく伝わる ような情報発信を タイムリー且つ、ス ピード感を持って 行い、保護者の理解 を得る。	保護者アンケート の結果、情報発信 に関する項目の肯 定的回答 91%。 新型コロナウィル ス感染症の影響に よる行事予定の変 更等丁寧な情報発 信を心掛け、保護 者の理解を得られ ている。	3	4	4	情報発信の方法 を、その時々 にあったもの(ホ ームページ・掲 示板・タブレッ ト・学校だより など)を選び、 保護者・地域に タイムリーに伝 えていく。
3	教職員の元気 仕事に意義や やりがいを感じ る働き方改 革の推進	継 続	教育活動や内容 の見直しを随時 行う。	業務の見直しを 定期的に行い、校 務整理を進め、教 職員が働きやす い職場にする。	仕事に意義 とやり がい(意 欲)を感じ る教職員 95%以上 各分掌の役 割に沿った 業務分担を 心掛け、主 任・主事が 担当部にお いてリーダー シップを発 揮できるよう に、人材育成を行 っていく。	仕事に意義とやりがいを 感じていると感じている 教員の割合は93%。	3	3	効率的な学校経営 を推進し、日々の授 業に集中すること ができるように取 り組む。 業務改善を中心と した働き方改革を 色々な角度から見 直す。	仕事に意義とやりがいを 感じていると感じている 教員の割合は93%。 今年度、4・5校 時までで授業を 設定し、放課後の 授業準備の時間 に充てる取組を 行ったが、中間評 価の結果と大き な変化は見られ なかった。	3	4	4	ICTの活用を通 して、事務処理の 効率化を図ると 同時に、教材研究 や授業準備に充 てる時間を増や せるように、教育 課程の編成や行 事の在り方を工 夫する。今後は、 組織的な取組と並 行して、個人の時 間の使い方につ いて改善すること も考えていく

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。